

水谷武彦が紹介したバウハウス

寺尾和幸

はじめに

一 経歴——ドイツ留学を中心に——

二 バウハウス紹介記事の考察

おわりに

はじめに

日本人で最初のバウハウス (Bauhau) への留学生 (一九二七年—一九二九年) であつた水谷武彦は帰国後、様々な活動を通じて日本へバウハウスを紹介した。東京美術学校に復職するとバウハウスの息吹を伝えるべく「構成原理」の講義を受け持ち、川喜田煉七郎が創設した銀座新建築工芸学院でも教鞭をとり、また各地で講演会を行うなど積極的な活動をしている。また、一九三一年 (昭和六) には川喜多や仲田定之助らとともに「生活構成研究所」を結成し、バウハウス流の教育方法を日本に普及させようとした。しかしながら文章による水谷のバウハウス紹介は雑誌に断片的に掲載されているのみで、まとまった著作は存在しない。そこで本稿では一連のドイツ留学から帰国後までの水谷の活動をあとづけるとともに、各誌における水谷の記事の変遷に検討を加えることで、水谷が紹介したバウハウス像について考察を試みたい。

なお、先行研究には勝村謙一による「バウハウスの日本人留学生 (2) ——水谷武彦について——」『デザイン学研究』No. 52 (一九八五年) がある。はじめて水谷武彦の活動をまとめた研究として意義深いものであり、本稿でも参考とするところが多かつた。

一 経歴——ドイツ留学を中心に——

バウハウス入学まで

水谷武彦は一八九八年 (明治三一) 東京に生まれた。一九二二年 (大正十) 東京美術学校図案科第二部 (建築装飾) を卒業後、同校の助教に任命され、図案科第二部の製図と建築学を担当した。一九二六年 (大正一五) 三月十三日、文部省より二年間のドイツ留学を命じられ、三月三十一日に日本を発つた (1)。同年七月にベルリンに到着し、ライマン・シュール (Schule Reinhard) に入学した。そこでの成績は悪くなかつたらしく、同校の機関紙『ファルベ・ウント・フォルム (Farbe und Form)』に彼の作品が取り上げられている (2)。

この頃バウハウスの作品展を見る機会があつたが、すでに新たな技法、新たな友人に囲まれ十分に刺激的な環境にいた水谷にとって魅力的には映らなかつたらしく、「ベルリンの街でバウハウスの金属家具や織物の展覧会に接したこともあるが、当時の私をあまり引きつけなかつた。」と回想している (3)。また、

同じ時期にバウハウスの広告を見た水谷は九月にデッサウを訪れ、グロピウス (Walter Gropius) をはじめとする教授陣に会っている (4)。そこで様々な説明を受けたのだが「入学案内を貰いベルリンに戻ってから、バウハウスに入学する決心はつきかねた」とあることから (5)、はじめはそれほどバウハウス入学に乗り気でなかったことがうかがえる。しかしヨーロッパの最新の建築研究に触れることが留学の目的であったこともあり (6)、結局一九二七年の二月にライマン・シューレでの作品や成績、履歴書を添えて入学を申し込んだ。それが受け入れられ、四月にデッサウ(Dessau)市立バウハウスに入学した。

水谷はデッサウの様子を以下のように述べている。

「市街は石だたみと、ルネサンスの古い——独逸らしい特徴を持ったそして特徴の無い——低い家並みの列である。(中略)だがそれだけであつたならばデッソウはおそらく現在迄ドイツ人にも耳狎れない名前だつたであらう。(中略)一九二八年度の全独逸を紹介するためのフランス人J・モルタアヌによる著書『新しきドイツ』の表紙に使われている十七個の写真の中の四つまでは一小都市デッソウに属するものなのである。(中略)ユンカー飛行機制作場とバウハウス——それがデッソウをベルリンよりも新しくし、ドイツ自身を一つの進歩的な可能者として新しく世界に記憶付けた。」(7)

つまりドイツにおける最先端の都市の一つとしてデッサウを位置付け、紹介している。またバウハウス校舎については次のように描写している。

「列車が停まる。デッソウ駅のホオムへ人々が降りる。と、もう彼らはそのホオムから得意な白い構造を持つた風景を見るだらう。——栗やリンデンや草地を載せて抜がつた明るい平原。その鉄道線路を越していくらか傾斜を持ち初める草地の遠い向ふにバウハウスが見える。——白い高い寄宿舎——点々と見える朱の扉——そして反射の具合で黒く透きとほつて遠方からは一枚の硝子板の様に見える長大な工場の横腹。——幾つかの付属室教室及び七つの工作工場の総てを含むこの三階建の大きい建物の側面は三

方共、一つの壁も柱も持たない。それは一面に細い鉄骨で支へられた五千枚に近いクリスタルグラス群から囲まれてゐる。」(8)

当時の最先端の都市で、最新の技術によって造られた建築物を目にした時の水谷の感動をよく伝えている。

予備課程

水谷はバウハウスの近くにあるアハトエツケという、輪形プランのアパートの一室を借り、バウハウスでの生活を始めた。はじめの六ヶ月間にバウハウスへの学生全員が等しく受ける予備課程は水谷の入学当時にはアルバース (Josef Albers) やモホリイナギ (Laszlo Moholy-Nagy) が担当していた。アルバースとは懇意になつたようである。戦後になつても二人の文通は続き (9)、またアルバースの水谷に対する評価も高かつたようだ (10)。

予備課程の実習で作つた作品の一つはハーバード大学のブッシュ・ライジンガー美術館に、もう一つはバウハウス資料館にある。また、作品の写真もいくつか収録されており、モホリイナギによるバウハウス叢書十四巻『材料から建築へ』や (挿図1)、後年ではハンス・M・ウィンクラー (Hans M. Wingler) 編集の『Das Bauhaus』にも作品が掲載されている (挿図2)。

工房教育

予備課程に続く一年間の工房教育において、水谷はプロイヤー (Marcel Breuer) の家具工房を選び、家具のデザインと制作に取り組んだ。水谷はプロイヤーについて「独逸における金属チウプ家具の創始者。此の金属椅子は決して曲線の美しさとか、外観の新しさの為に造られたものではなくて、椅子の機能——腰掛けることにより優れた解決の為めである。(中略)その他彈力、触感、体位等の問題の解決と、軽さ、清潔さの為に造られてゐる。」と紹介している (11)。プロイヤーの指導に関して詳述されている記事は見当たらないが、一九

三〇年十一月から丹波屋商店の依頼によって鋼管製の家具の製造を監督しているほか、一九三一年三月の「東京美術学校卒業制作展」では水谷の鋼管家具製品が展示されており、このことから考えてもプロイヤーに学んだところは多かつたといえよう(12)。

なお、雑誌『パウハウス』の一九二八年2/3号には水谷が「パウハウスで最も小さな人」として紹介され、水谷の制作したスツールの写真が掲載されている(挿図3)。

建築科

最後の建築科においては主任教授ハネス・マイヤー、講師マルト・シユタムのもとで都市計画や集合住宅のデザインの問題に取り掛かった。水谷の在学当時はハネス・マイヤーの設計によるベルナウの労働者学校の計画が進行していた。水谷の一九二八年五月の日記には、その計画に関わる喜びが素直に記されている。

「私達にとつて愉快なことは、校長ハネス・マイヤーの設計が、A・D・G・B(共同独逸産業組合)の労働者学校の懸賞に当選した事である。(中略)その各教室及び付属室で使はれる家具製作の基本的な研究が、パウハウス工場に持ち込まれた。私達木工工場の全部でそれを引き受ける事になった。(中略)私は折畳み機の脚の研究にかかった。」(13)。

帰国後の一九三〇年の二月にマイヤーから受け取った手紙には、アジアへの並々ならぬ関心が表明されており、「——考えて見て欲しい——今一人の日本人を送ることは不可能なものかどうか——我々はアジアの動きに個人的にでも接したいと考へる。」とあることから、マイヤーの水谷に対する評価も悪くなかったようだ(14)。

帰国

水谷は一九三〇年(昭和五)一月三日に帰国し、東京美術学校建築科に復職すると「パウハウスで学んだ創造的精神を日本にも、伝えたいものだと思つて」(15)、「構成原理」の講義を開いた(16)。また川喜田煉七郎、仲田定之助、武井勝雄、三浦直政らとともに、講演や地方出張によって、パウハウス精神の宣伝につとめた。一九三三年(昭和八)には川喜田煉七郎が主宰する銀座新建築工芸学院で教鞭を執るとともに、川喜田の助言者としてパウハウスの教育理念を伝えた。一九四四年(昭和一九)に東京美術学校を退職するが、戦後、東京芸術大学となった後も非常勤講師として一九四九年(昭和二四)から一九六五年(昭和四〇)まで構成原理の講義を担当した。また、芸大のほかにも多摩美術大学、日本大学、東京都立大学等でも教壇に立った。

二 パウハウス紹介記事の考察

パウハウス帰りの人物としてその創立理念、教育方針や教育内容を伝えることを期待されていた水谷は、講義や講演等によって積極的にパウハウスを紹介した。同様に文章でもその期待に込えている。帰国後から第二次世界大戦前までに水谷が執筆したパウハウスに関連する主な記事としては以下のものが挙げられる。ただしこれらは水谷のパウハウス紹介の変遷を見るにあたり重要だと思われる記事を挙げていたのであって、網羅的なものではないことをあらかじめ断つておく。

「パウハウスはどこにあるか?どの様な過去を持つか?その目的は?その組織は?そして『パウハウスのデッサン(絵画素描)』について——簡単に」

『校友会月報』第二十九巻第一号 一九三〇年四月

「趣味講座 新興独逸とパウハウス」『アサヒグラフ』第十四巻第十五号

一九三〇年四月

「趣味講座 新興独逸とパウハウス (完)」同 第十四卷第十六号

一九三〇年四月

「パウハウスと「建築に対する主張」』『アトリエ』第七卷第八号

一九三〇年八月

「鋼管製家具」『帝國工芸』第五卷第五号 一九三二年五月

「パウハウスの工作教育 (WERKLEHRE)」『美学研究』第5輯 一九三二年六月

「構成基礎教育」『建築画報』第二十二卷第十号 一九三二年十月

「構成基礎教育について」『富山教育』二二五号 一九三二年十月

「生活構成と図案」『学校美術』第七卷第九号 一九三四年九月

「パウハウスの解散より復興へ」『美術時代』第二卷第二号 一九三八年二月

(三月の可能性もあり)

日本におけるパウハウス紹介はすでに仲田定之助や大内秀一郎によってなされていた。最初の本格的なパウハウス紹介記事といえる仲田定之助「国立パウハウス(一)(二)(三)『みづゑ』一九二五年六月号、七月号)ではグロピウスの言葉を用いてパウハウスの理念を紹介している。

「過去の精神を具体するのはアカデミーである。(中略)彼等は空虚な描画家的、画家的能力しか持合せず、必要な物質、技術、経営の現実と閑却して、結局美学的思索しか出来ぬ。アカデミーの進展は漸次に衰えた、全民衆生活は民衆芸術を探索し初めた。(中略)茲にパウハウスは芸術的天賦に対する新しき総合教育計画への縁たらんとして、アカデミーの思索的製作分野に、工芸学校の技工分野とを結びつけた。それは造形創造の手工的及び科学的分野を包括する。その主旨は、総べての芸術的創造を融合一致すべく集めて、分離するべからざる組成分子としての新建築芸術に、あらゆる工芸美術家的訓練を再び結合させやうとするにある。そしてパウハウスの最後の目標は大建築——統一制作芸術である。そこでは純芸術と裝飾芸術と

の限界が撤せられる。」(17)

この記事におけるパウハウス紹介の特徴としては概括的であることが挙げられる。理念に続いてパウハウスのカリキュラムについて述べているが、例えば予備課程については「創造力を解放する目的を以て、相互の分離すべからざる技巧及び形態制作を進める。材料の自然を感得し、造形的形成の原則を了解させる。観察及び表現に個性をコンベンションから解放することは最も主要な問題である。」とその目的を説くのみである(18)。また、工房教育についても「建築の創造制作に対する重要な予備を与える。(中略)工作教育は手工及技術を教えるが、それは過程であつて、夫れ自身が目的ではない。パウハウスは工業と結合をしようとするもので単なる手工学校ではない。」と紹介するにとどまっている(19)。理念や目的は丁寧に説明されているが、具体的内容までには踏み込んでいない。

『みづゑ』のパウハウス紹介記事から三年後の一九二八年九月号の『アトリエ』に寄せた記事「パウハウス」でも機関紙『パウハウス』やプロイヤーの鋼管製椅子に関する記述が追加されているのみで、その紹介の仕方に大きな変化はない。

当然のことであるが短期間訪問しただけでは得られる情報は限られ、詳述しようにもやはり限界がある。例えば大内秀一郎がパリから寄稿した「パウハウスとグロピウス氏」(『文化の基礎』一九二五年四月)は、題名こそパウハウスの名を冠しているが、その記述は外観と内装の描写や訪問の様子に留まっている。大内秀一郎とともにパウハウスを訪問した堀口捨巳が執筆した「パウハウス」(『建築画報』一九二六年十月)ではグロピウスの部屋とそこにある家具の写真掲載し、それらを「生産的工場の製造品に対するモデル、型を作る推理的な試作」と形容しているが、そもそもパウハウスが何であるかの説明が欠けている(20)。これらはどれも教育機関としての側面を軽視しており、パウハウス紹介文としてはいささか物足りない。

帰国した水谷には、実際に肌に触れたパウハウスの雰囲気やそこで学んだ授業内容等を伝えることが期待されたことだろう。実際に水谷による記事は仲田や大内らの記事と対照的に、具体的かつ詳細な描写がなされている。

「趣味講座 新興独逸とパウハウス」『アサヒグラフ』(一九三〇年四月)

水谷の最初のパウハウス紹介記事は『アサヒグラフ』誌上に二回にわたって掲載された「新興独逸とパウハウス」である。グラフ雑誌の特性を活かして写真の多数配し、はじめてパウハウスを知る人にも理解しやすい構成となっており、パウハウスの概要や他の美術学校との相違点に続いて、予備課程、工房教育、建築科の内容にも言及されている。

この紹介文は同月に刊行された『校友会月報』の文章とほぼ同一である(21)。

パウハウスの紹介に一貫性をもたせるためなのか、それともただの転載なのか判断しかねるが、後の紹介文にも似たような言い回しが多々見受けられる。

『校友会月報』における報告(一九三〇年四月)

水谷によるパウハウス紹介の中でも内容、分量ともに最も充実しているのが『校友会月報』(一九三〇年四月)に掲載された「パウハウスはどこにあるか?」の様な過去を持つか?その目的は?その組織は?そして「パウハウスのデザイン(絵画素描)」について「簡単に」である。帰国直後の執筆ということもあり、興奮を抑えられない筆致で、生き生きとした表現が見られる。パウハウスの大まかな説明については前述したとおり『アサヒグラフ』での紹介文と同一の部分もあるが、こちらのほうが詳細な説明がなされている。中でも筆者が注目するのは実際の授業風景が描かれている点である。報告の中ではシュレンマーの講義について、日記を用いてその子細を述べている。

「十時からのシュレンマーの講義——人間(中略)是迄人間体の描写は姿勢描写の上だけに限られてゐた。だがそれは今、形態機構描写を加へるこ

とによつてその範囲を拡大する。つまり今迄の方法と一緒に人間の線。面。

立体。数。量。比例。骨。筋肉。精神関係。等々についての——法式的描写が行はれる。(中略)この講義では形式的、動物的、及び哲学的——の三つの部分に依りてそれぞれ形式描写、自然科学的建造、超絶的思想の各部分を平列的に統一することによつて人間を定義する。(中略)第十九時から第二十一時まで——教授シュレンマーの時間。——裸体素描(ここでは単調な教室の代わりに特別な建造。器具類、照明装置及び音楽によつて変化と強調が与へられる。)(中略)今迄の裸体描写ではモデルが数時間同じポーズで立っていた。だがここでは、不断、自由な激しい訓練を食物としてある舞踏家の肉体から私達は本当の有機的な勢力によるポーズ(現実に於ては絶えず変化しつある人体がその運動によつて空間に作る立体軌跡の一要素体として真に関連的な瞬間のポーズ)を見出すことが出来るだらう。」(22)

水谷以前のパウハウス紹介がカリキュラムなどの外枠の紹介にとどまっていたのに対し、この記事では授業風景が描かれている。このことは当時の読者の目にも新鮮に映ったことだろう。とはいえ水谷は具体的な描写においてのみ評価されるわけではない。冒頭ではパウハウス全体像を紹介している。

「パウハウスは人間の造形的な生活過程のすべての構成を有機化する。(中略)パウハウスは個人的な技術に専念する一学校でなく、一実験所でもない。パウハウスは教室のほかに六つの工場と学校それ自身の建築事務所を持つ。(中略)彼等の活動は直接国民の生活と関係しそれを一層有機化し合理化して行くことに努力する。」(23)

帰国直後の頃は他の記事の冒頭でもパウハウスの概要を紹介している。まずはパウハウスの知名度を高めることが先決であった。

概要に続いて予備課程の紹介があり、「パウハウスでは唯あらゆる物質の特性を考察し呑み込むための理論と実際の研究が、物質的並びに抽象的形態教育

によつて行はれ、その目的も「すべての構成の基礎を共通にし一致させることによつてあらゆる生活をより有機化する。」と記述している(24)。

そして講義内容について触れている。アルバースの講義「物質的形態教育」では「特に実用的な工作意向の無い自由な作品が構成され、それにより木や紙、金属などの素材の特性を純粋に理解することができた(25)。また、同講義の主な目的として「その工作材料(種々な物質)が「最も大きい荷重力及び強度。最も狭い或は小さい結合。最小の支点」等のどれか一つ或は幾つかを持つ様に特性を極度に利用し同時に材料と仕事の浪費を最も少くして効果は反対に大きくなる様にする」ことが重要視され、「この意味での経済が教育の主動起になつてゐる(26)」た。それゆえに「単に視覚的に美しいか奇異な作品はこゝでは価値少く考へられ(27)」ていたという。

「バウハウスの工作教育(WERKLEHRE)」『美学研究』(一九三二年六月)年代が前後するが、アルバースの講義に関しては一九三〇年(昭和五)十一月二二日に行われた帝大山上御殿での講演でも触れられており、翌年六月に発行された『美学研究』にその概略が載っている。この講演では予備課程の紹介、とくにアルバースによる物質的形態教育の説明に力点が置かれた。

「アルベルスの物質的形態教育——一般に工作教育と言はれてゐる此教育は、バウハウスのシステムを知る上に最も重要なもので、(中略)各特別の部門に進む者に同一の基礎即ち物質に対する共通な了解を与へ様とするものである。(中略)予備科に於ける工作教育はつまり此の発明発見力即ち独創力の養成と訓練との最初の手ほどきをする処であるし、それは又同時に工作材料つまり物質の性質と能力をよくのみ込ませることと、その取り扱い、主として構造と結合を研究する為めの教育である。」(28)

工作教育の目的や方法に続いて、講義の様子について述べている。このあと実際の作品を例に出している(図4、5)。

水谷によるバウハウス紹介は、はじめのうちには予備課程の説明に重きが置かれている。特に授業風景の描写はほとんどがアルバースの工作教育に集中しているのは興味深い。これはおそらくバウハウス受容の黎明期において、比較的確立したシステムを持ち、かつ全員が学ぶべき基礎である予備課程をまずは知つてもらい、後述するようにそれを日本にも広めようとしたためと考えられる。

「バウハウスと『建築に対する主張』」『アトリエ』(一九三〇年八月)

『アトリエ』掲載の「バウハウスと『建築に対する主張』」ではバウハウスの説明がやや簡略化されており、「BAUとはBAUEN即ち建造の意味で『建造とは生活過程の構成を言ふ。』と創立者フルテル・グロピウスが特に註している。」(29)とグロピウスの言を借りて述べているのみである。これに続く予備課程や工房教育の説明にもほんの數行が費やされているのだが、記事のタイトルにもある通り、建築科の説明とそれに携わつた教授達の建築に対する考え方の紹介にはより多くのページが割かれている。

例えば、水谷の在学時期に建築科の主任であったハネス・マイヤーは「建築は機能×経済である。(中略)同時にそれは幾つかの部門に分れた専門家達による一つの共同的な仕事である。」と述べており、バウハウスの理念を建築科にも反映させていることが分かる(30)。また、この記事の後半はハネス・マイヤー設計のベルナウ労働者学校に関するもので、その設計図や写真とともに設計の目的や理念が紹介されている。

「鋼管製家具」『帝國工芸』(一九三一年五月)

一九三二年に入るとバウハウスそれ自体の説明がないまま、その教育内容に触れる例が見られるようになる。『帝國工芸』に執筆した「鋼管製家具」においてはマルセル・ブロイヤール、ミース・ファン・デル・ローエ、マルト・シユタムといったバウハウス教授陣の制作した鋼管製椅子が紹介されているが、バ

ウハウスそのものは言及されなまま、主に鋼管製椅子の開発された経緯と椅子の種類や性質についての説明がなされている。

『構成基礎教育』『建築画報』(一九三二年十月)

『建築画報』一九三一年十月号に執筆した「構成基礎教育」でもパウハウスの説明がないまま、予備課程の内容に似た事柄について触れている。ここでは「飛躍」をキーワードにして「構成」の専門化、全体化を説いている。

「構成は感覚に基礎を置き部分より全体へ飛躍によつて発展する。(中略)『穴を持つ紙』等の課題によつて飛躍の如何なるものたるかを知る。飛躍が部分的の時には変化も部分的である。一枚の紙も欠の入れ方によつて、いつ迄も平面に留り、立体にはならない。けれども欠の入れ方によつて、平面はたちまち立体となる。平面より立体への飛躍!」(31)

『建築画報』一九三一年十月号は同年に結成された「生活構成研究所」が掲げる「生活構成」を特集として組んでおり、水谷の他、浜田増治、川喜多煉七郎が執筆している。これ以降の水谷の記事ではパウハウスの説明は見られなくなり、予備課程における構成の理論を応用・発展させた「生活構成」や「構成基礎教育」の紹介にパウハウスのものが反映するようになる。

『構成基礎教育』について『富山教育』(一九三二年十月)

水谷が文章を寄せた雑誌に注目してみると、美術、建築関係の雑誌のほかに『学校美術』や『富山教育』等、美術教育関係の雑誌にも寄稿していることに気づく。このことは記事のほとんどが建築誌に掲載されている山脇巖と大きく異なる。

講演会を元にした『富山教育』一九三一年十月号掲載の「構成基礎教育」では各種の構成教育について段階的に説明している。まずは「その基礎として、もっと部分的な実用目的をもたぬ構成の研究が必要となつてくる」としてパウ

ハウスの予備課程にあるような「感覚構成」「触覚構成」「視覚構成」の練習方法や目的を述べている(32)。

後半では「実用目的を持った構成」として家具や建築にも言及しているのだが、練習方法等の具体的内容には触れず、椅子の例を用いてその考え方について論じている。それによれば「われわれに必要なのは飛躍の道程」であるという。それまでは「われわれの概念は、『椅子』といへば直ちに、木片で作られてをり、背の寄り掛りは布片地を用ひ、肘掛のあることを想起」され、このことは「動かすことの出来ない概念」となっていた。それが「少しづつの変化はあつたが大體一九二〇年頃まで続いていた。然るにその時飛躍的な鋼鉄製の図の如き椅子が現はれてきた」という(33)。

『現代の生活構成と図案』『学校美術』(一九三四年九月)

教育雑誌『学校美術』に掲載された「現代の生活構成と図案」は一九三三年(昭和八)八月に学校美術協会の主催した青山師範学校での夏季図案指導講習会にて水谷が講演したものである。この講演では「生活構成」の種類と図案との関係について述べている。水谷によれば「生活構成」は平面、立体、空間構成の三種に分かれており、平面が土台となつてその上に立体、空間といったより高次のものが包括的に存在する。「空間の中には平面も立体も存在してゐることを知らねばならない。一つの建物の中には平面的な絵画があり立体的な彫刻だとか椅子だとか卓子なども存在出来るのであるし、又人間も住ふことが出来る。又立体の或部分の面に施された図案は平面である。空間は形の上では非常に複雑であつてこのやうに立体、平面の二つを含んでゐるのである。」(34)

それに続き個々の構成について部分的に説明している。平面構成についてはカンディンスキーの作品を純粋構成の新境地を開くものとして紹介しつつ、図を利用してシュパンヌング(Spannung)の説明を試みている(挿図6、7)。

「1と5とは面積は同じであるが、1の方が重く見え、5の方は軽く見

える。この現象をシュパンヌング(Spannung)と云ふ。又1の方は求心的に見える。これを傍系シュパンヌングと云つてゐる。次の図の二つの三角形をみると矢の方向のシュパンヌングを感じる。平面構成においてはシュパンヌングは大切である。」(35)

平面構成のほかの種類として水谷は光画(36)、ポスター、織物・壁紙を挙げている。特に光画については写真、フォトグラム、フォトモンタージュ、フォトプラスチックと当時の先駆的な技法を紹介している。

教育誌への執筆は水谷がバウハウスの教育を日本に広めようという意図を持つていたことを推測させる。それゆゑに記事の内容も構成の目的や具体的な練習方法等の記述が多く、構成の種類を紹介というよりは指導方法の紹介に近いと言える。

「バウハウスの解散から復活へ」『美術時代』(一九三八年二月三月の可能性も)

筆者が確認した水谷による戦前最後のバウハウス関連の記事は『美術時代』掲載の「バウハウスの解散から復活へ」である。この記事ではまずバウハウスの残した成果について解説している。

「デッソウに於けるバウハウスは、ワイマールで発展させた理想を更に積極的に追求し、ワイマール時代の手工芸的な方向から転じて、工業に対する大量生産への試作研究所となつて、当時急務であつた住宅問題、ジールドルングの規格化と大量生産の問題に活躍した。」(37)

ついで、バウハウス解散後、ドイツの建築界に起こつた復古的な変化について、「ナチスの現在では、公共建築の建造が多く、オリンピック会場、ニュルンベルグ・ナチス大会場等著名の大建築が建てられ」、また「住宅問題も中世の都市のやうに三角形の屋根を頂き、町を中心には教会さへも建ち」、つまり「ドイツではこのやうに建築、美術は、古代のもの新しい復興、民族精神の発揚が

目につくのである。」と述べている(38)。これに続いて各国の建築界の動きを追い、最後はアメリカのニュー・バウハウスを紹介している。

この後は戦後になるまで水谷が執筆したバウハウス関連の記事はない。水谷はバウハウスの解散とその後ドイツが古典的傾向に転換したことに失望したのか。あるいは日本が右傾化していた時代にあつて、バウハウスについて発言しても、だれもまともに相手にしないと絶望していたのかもしれない。

おわりに

本稿においては水谷武彦が執筆した雑誌記事から彼のドイツ留学とバウハウス紹介に関するものを取り上げ、概観した。水谷によるバウハウス精神の紹介方法の変遷は日本におけるバウハウス認識が変化していく過程を表しているといえる。はじめはバウハウスそのものを知つてもらう為とその全体像を紹介していたのが、認識の広がりとともに徐々に個別的・具体的な事柄へとその重心は移動し、ついには自らが考え出した構成教育を紹介するに至る。バウハウスの名が出ないまま、その理念や精神が受け継がれ、普及したといえる。しかし日本の右傾化に伴い、左翼的なものと目されていたバウハウスの紹介記事もその数を減らしていくことになる。

戦後になると水谷は再びバウハウスについて語り始める。主なものとして

「20世紀を飾つたBAUHAUS」『新建築』一九五〇年十一月号

「バウハウスのカリキュラム その生活と体験」『美術手帖』一九五四年六月号

「バウハウスについて その構成」『美術ジャーナル』No.10-13 一九六〇年がある。いずれもバウハウスの全体的な紹介の後に各課程や教授達についての具体的描写という帰国直後の文章構成が踏襲されている。日本が右傾化したために忘れられ、あるいは敵視されていたバウハウスの正しい認識を広める、

あるいは再認識を促すという意図があったと考えられる。水谷は日本人で最初のパウハウス留学生として、その使命に忠実であったのである。

(付記)

本稿の執筆にあたり、神戸大学の梅宮弘光先生から貴重な資料を提供していただきました。ここに謝意を表します。

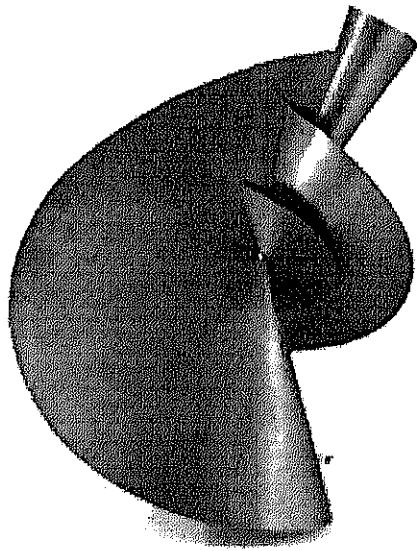
註

- (1) 芸術研究振興財団編『東京藝術大学百年史 東京美術学校篇』第三巻 一九九七年 四六〇頁。
- (2) 井筒明夫『The Bauhaus: a Japanese Perspective and a Profile of Hans and Florence Schust Kroll』一九九四年 鹿島出版社 一一一・一一三頁。
- (3) 水谷武彦「パウハウスのカリキュラム その生活と体験」『美術手帖』一九五四年六月五一頁。
- (4) 同前 五一頁。
- (5) 同前 五一頁。
- (6) 水谷が留学する際に東京美術学校長から文部大臣に宛てた派遣上申案には「派遣を要する事由」として「世界に於ける最古最新各種ノ建築物ニ接見シテ實地的研究ヲ遂グルノ要アリ」とある(芸術研究振興財団編『東京藝術大学百年史 東京美術学校篇』第三巻 一九九七年 四六〇頁)。
- (7) 水谷武彦「パウハウスはどこにあるか?」の様な過去を持つか?その目的は?その組織は?そして「パウハウスのデッサン」(絵画素描)について——簡単に『校友会月報』第二十九巻第一号 一九三〇年四月 五頁。
- (8) 同前 六頁。
- (9) 水谷武彦「パウハウスのカリキュラム その生活と体験」前掲(註3) 五四頁。
- (10) 1953年アルバースがフルブライト基金宛てに書いた手紙には「彼(水谷)がデッサンで我々の出会った学生のうちもっとも才能豊かな学生の一人であった」という私の言葉に、全パウハウスが同意するであろう」とある(長田謙一「封印されたパウハウス—水谷武彦の記憶—」△近代日本デザイン史をめぐる連続シンポジウムV 配布資料 松戸市民劇場 一九九九年十一月二十日)。
- (11) 水谷武彦「パウハウスと『建築に対する主張』」『アトリエ』第七巻第八号 一九三〇年八月 六六頁。
- (12) 水谷武彦「鋼管製家具」『帝国工芸』第五巻第五号 一九三一年五月 二四五頁。
- (13) 水谷武彦「パウハウスと『建築に対する主張』」前掲(註11) 六六―六七頁。
- (14) 水谷武彦「パウハウスはどこにあるか?」の様な過去を持つか?その目的は?その組織は?そして「パウハウスのデッサン」(絵画素描)について——簡単に「前掲(註7) 十頁。

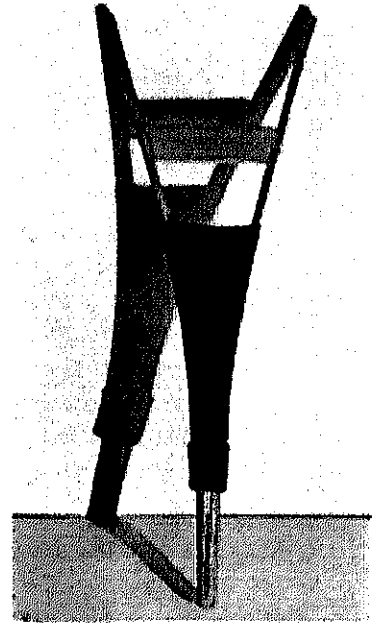
- (15) 水谷武彦「パウハウスのカリキュラム その生活と体験」前掲(註3) 五六頁。
- (16) 東京美術学校における水谷の講義の様子については芸術研究振興財団編『東京藝術大学百年史 東京美術学校篇』第三巻 前掲(註11) 四六二頁―四六五頁に詳しく載っている。
- (17) 仲田定之介「国立パウハウス(一)」「みつゑ」第二四四号 一九二五年六月四頁。
- (18) 同前 五頁。
- (19) 同前 六頁。
- (20) 堀口捨巳「パウハウス」『建築画報』一九二六年十月 二九頁。
- (21) 誌面の都合もあつて『校友会月報』にあるような日記などは掲載されていない。また、全体像の説明も『校友会月報』の方が充実している。
- (22) 水谷武彦「パウハウスはどこにあるか?」の様な過去を持つか?その目的は?その組織は?そして「パウハウスのデッサン」(絵画素描)について——簡単に「前掲(註7) 十一頁。
- (23) 同前 六頁。
- (24) 同前 六一―六七頁。
- (25) 同前 七頁。
- (26) 同前 七頁。
- (27) 同前 七頁。
- (28) 水谷武彦「パウハウスの工作教育(WERKLEHRE)」『美学研究』第五輯 一九三一年六月 九四、九五頁。
- (29) 水谷武彦「パウハウスと『建築に対する主張』」前掲(註11) 六二頁。
- (30) 同前 六四頁。
- (31) 水谷武彦「構成基礎教育」『建築画報』第二十一巻第十号 一九三一年十月四頁。
- (32) 水谷武彦「構成基礎教育について」『富山教育』二二五号 一九三一年十月十頁。
- (33) 同前 二二頁。
- (34) 水谷武彦「生活構成と図案」『学校美術』第七巻第九号 一九三四年 一八一―一九頁。
- (35) 同前 一九頁。
- (36) 同前 二〇頁で、水谷は「今迄写真と云われてゐたが、光面と云ふ方が正しい」と主張している。
- (37) 水谷武彦「パウハウスの解散より復興へ」『美術時代』第二巻第二号 一九三八年二月(三月の可能性もあり) 四七頁。
- (38) 同前 四九頁。

主要参考文献

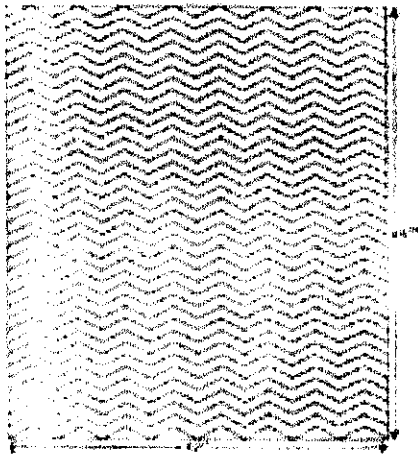
- 水谷武彦「趣味講座 新興独逸とパウハウス」『アサヒグラフ』第十四卷第十五号
一九三〇年四月
- 水谷武彦「趣味講座 新興独逸とパウハウス(完)」『アサヒグラフ』
第十四卷第十六号 一九三〇年四月
- 水谷武彦「パウハウスはどこにあるか?どの様な過去を持つか?その目的は?その組
織は?そして『パウハウスのデッサン(絵画素描)』について——簡単に」『校友会
月報』第二十九卷第一号 一九三〇年四月
- 水谷武彦「パウハウスと『建築に対する主張』」『アトリエ』第七卷第八号
一九三〇年八月
- 水谷武彦「鋼管製家具」『帝國工芸』第五卷第五号 一九三一年五月
- 水谷武彦「パウハウスの工作教育(WERKLEHRE)」『美学研究』第5輯
一九三一年六月
- 水谷武彦「構成基礎教育」『建築画報』第二十二卷第十号 一九三一年十月
- 水谷武彦「構成基礎教育について」『富山教育』二二五号 一九三一年十月
- 水谷武彦「生活構成と図案」『学校美術』第七卷第九号 一九三四年九月
- 水谷武彦「パウハウスの解散より復興へ」『美術時代』第二卷第二号
一九三八年二月(三月の可能性もあり)
- 水谷武彦「パウハウスのカリキュラム その生活と体験」『美術手帖』
一九五四年六月
- 水谷武彦「パウハウスについて その構成(一)〜(四)」『美術ジャーナル』No.10-13
一九六〇年
- 大内秀一郎「パウハウスとグロピウス氏」『文化の基礎』第五号 一九二五年四月
- 堀口捨巳「パウハウス」『建築画報』一九二六年十月
- 仲田定之介「国立パウハウス(一)」『みづゑ』第二四四号 一九二五年六月
- 仲田定之介「国立パウハウス(二)」『みづゑ』第二四五号 一九二五年七月
- 仲田定之介「パウハウス」『アトリエ』第五卷第九号 一九二八年九月
- 勝村謙一「パウハウスの日本人留学生(2)——水谷武彦について」『デザイン学研
究』No.52 一九八五年
- 川喜田煉七郎「新建築工芸学院」開設の時代」『デザイン』No.34 一九六二年七月
- 井筒明夫「The Bauhaus: a Japanese Perspective and a Profile of Hans and
Florence Schust Knoll」一九九二年 鹿島出版会
- 梅宮弘光「日本におけるパウハウス受容とアヴァンギャルドのエートス」『センシブル美術
館』Bauhaus 1919-1933 展図録 一九九五年
- 五十殿利治「受け継がれる『パウハウス』体験——仲田定之助をめぐる——」『パウハ
ウスとその周辺I(パウハウス叢書 別巻1)』中央公論美術出版 一九九六年
- 芸術研究振興財団編『東京藝術大学百年史 東京美術学校篇』第三卷 一九九七年



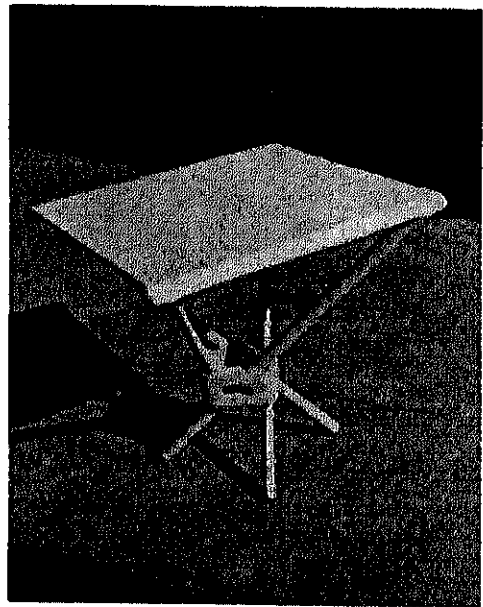
挿図2 ハンス・ウインクラー『Das Bauhaus』
に掲載された水谷の作品



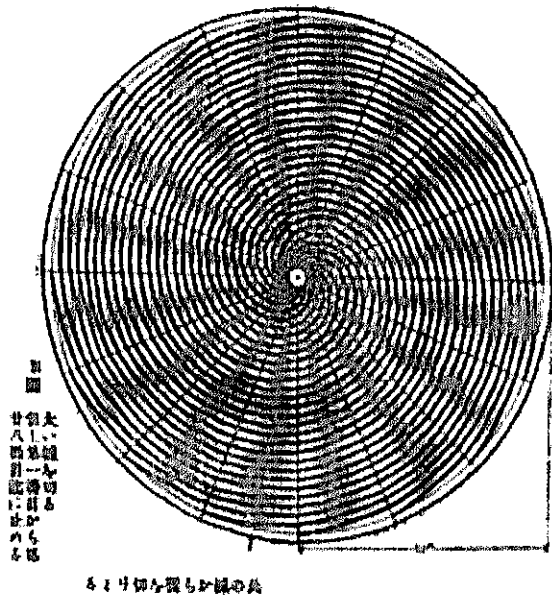
挿図1 モホリ・ナギ『材料から建築へ』に
掲載された水谷の作品



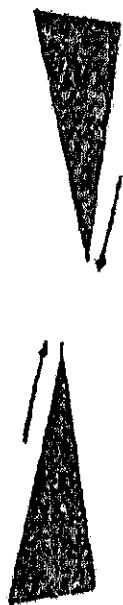
挿図4 講演会（帝大美学談話会）において水谷
が使用した工作教育の作品の例



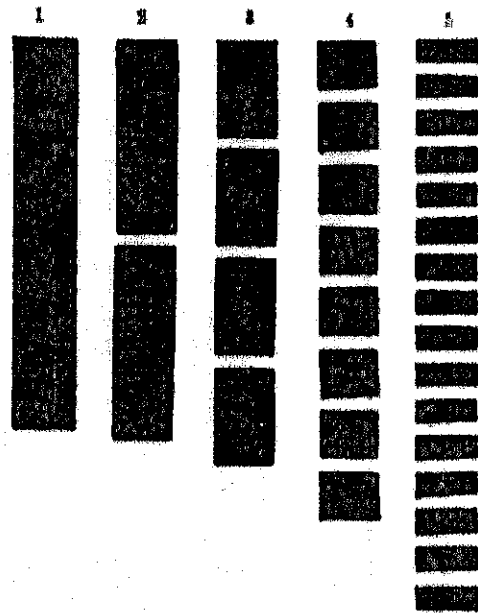
挿図3 機関誌『bauhaus』1928年第2/3号に
掲載された水谷の作品



挿図5 講演会（帝大美学談話会）において水谷が使用した工作教育の作品の例



挿図7 講演会（現代の生活構成と圖案）において水谷が使用した平面構成の例



挿図6 講演会（現代の生活構成と圖案）において水谷が使用した平面構成の例